

くすり博物館だより

VOL. 61

2009年(平成21年)5月

NAITO MUSEUM OF PHARMACEUTICAL SCIENCE AND INDUSTRY



内藤記念くすり博物館
〒501-6195 岐阜県各務原市川島竹早町1
Tel: (0586) 89-2101 Fax: (0586) 89-2197
<http://www.eisai.co.jp/museum/>

企画展 「江戸に学ぶ からだと養生」 開催期間 2009年5月14日(木)～2010年3月28日(日)

18～19世紀のヨーロッパでは、人間の身体の仕組みが科学的に解明され、医学・薬学が飛躍的に発展しました。医学・薬学の新しい知識や情報は、日本へも蘭学という形でもたらされました。それまで信じられてきた五臓六腑とは異なる身体の構造に人々は驚き、それらの知識はやがて庶民の間にも広がりました。

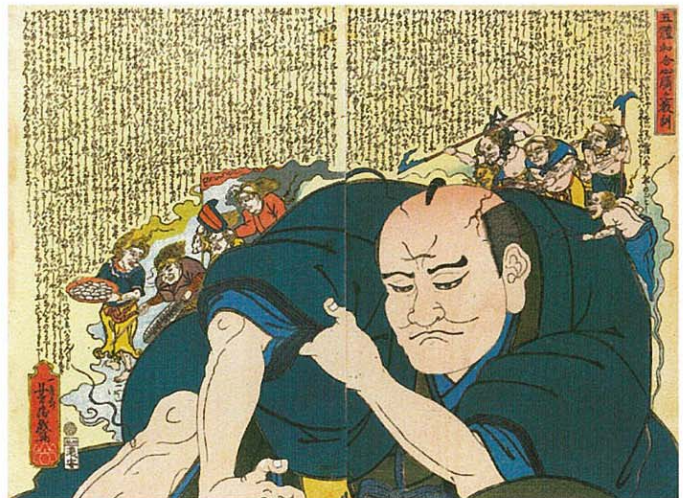
その一方で、当時は身体をいたわり、長生きするための方法として、“養生”法があり、身体や健康管理への関心が高まっていました。日常生活に留意して健康の増進をはかることは、今日の予防医学に通じるものがあります。

今年度の企画展は、『解体新書』など江戸時代の蘭学に関連する資料、また、『養生訓』などの養生についての資料を展示します。江戸時代の人々が、どのような思いで『養生訓』を読んだのか、また人々が身体や健康についてどのように考えていたのか、そして、どのように健康管理を行っていたのか、理解を深めていただけたら幸いです。

日本では、漢方医学に基づき、体内の構造については五臓六腑説が信じられていました。五臓六腑の五臓とは肝・心・脾・肺・腎で、六腑とは、大腸・小腸・胆・胃・三焦・膀胱です。しかし、これは現在の西洋医学で言うところの臓器と必ずしも働きは一致しておらず、三焦のように実際にはない概念的な臓器も含まれていました。

身体の仕組みについての情報は、解説付きの錦絵によって人々の間に普及していきました。戯作者の仮名垣魯文らによって、読み物としておもしろく書かれたものもあります。

からだの仕組みとは



▲五体合心膺之教訓

一秀斎芳勝画 文久2年(1862) 36.7×50

両手、両足、頭、背中など五体をそれぞれ家族の一員とみなして、一致協力して働くことが心身健康の源であると説いている。



◀飲食養生鑑(左) 房事養生鑑(右)

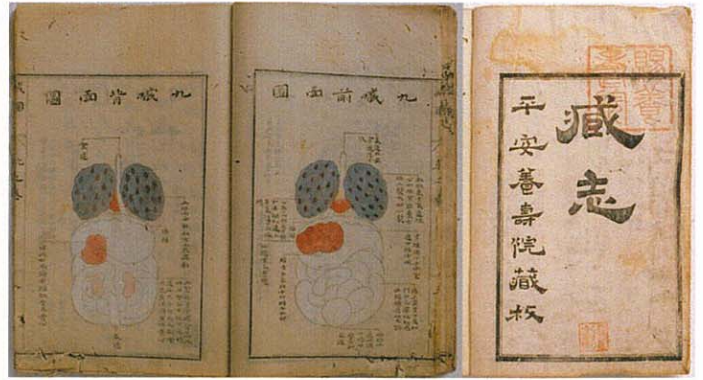
歌川国貞画 江戸後期 50×37、52×37

どちらの絵も、こびとが説明役となり、臓器の役割を紹介し、暴飲暴食など日常生活の不摂生をいさめている。

解剖と記録

江戸時代の医学界に、臨床経験を重要視する古方派と呼ばれる一派がありました。古方派の一人・山脇東洋は、五臓六腑説に疑問を抱き、宝暦4年（1754）に京都の六角獄舎において行われた日本最初の人体解剖に立ち会いました。山脇東洋はその時の記録を5年後に『蔵志』として出版しました。

その後、明和7年（1770）には古河藩の藩医・川口信任が『解屍編』を著しました。その翌年、明和8年（1771）には、杉田玄白、前野良沢、中川淳庵らが江戸の小塚原で行われた解剖に立ち会いました。その際、持参したオランダ語の解剖書『ターヘル・アナトミア』の中の解剖図が実物そっくりに描かれているのに驚き、翻訳を決意したといわれています。



▲『蔵志(乾坤之巻)』

山脇東洋(尚徳)著 山脇侃校 養寿院蔵版 宝暦9年(1759)

日本で最初の実証的な解剖学書。ただし、当時は宗教的な禁忌もあり、解剖を近くで見る(観臓)にとどまったが、図に記し、五臓六腑説の誤りを明らかにした。

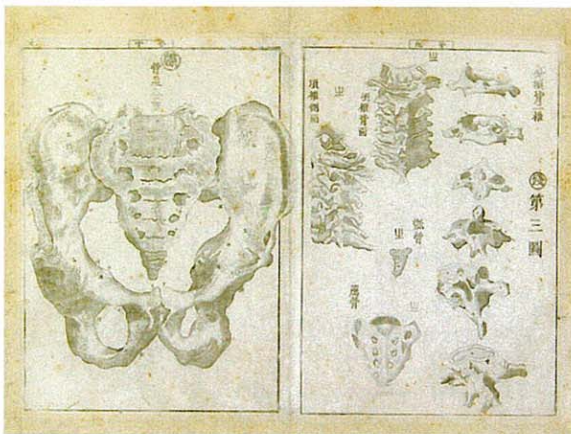


◀『解体新書』

関児武思(クルムス)撰 杉田玄白訳 安永3年(1774)

全5冊のうち、第1冊が序図篇で内臓諸器官が図示され、第2～4冊が解説篇である。

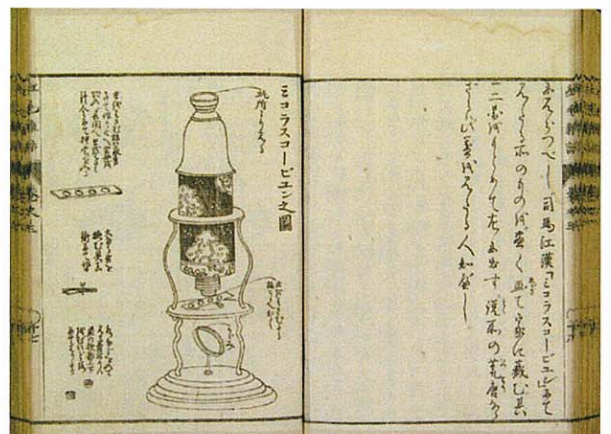
解体新書の原書は、「Ontleedkundige Tafelen」(解剖学表)であり、これはドイツ人・Adam Kulmus (1689-1745) 著のドイツ語の解剖書を、1734年にオランダ語に翻訳したものである。



▲『重訂解体新書』

鳩盧模斯(クルムス)撰述 杉田玄白訳 大槻玄沢重訂 1826(文政9)

『重訂解体新書』は、大槻玄沢が『解体新書』の翻訳をやり直し、解説を加えて完成させたものである。



▲『紅毛雑話』

森島中良編 天明7年(1787)刊

内容は、オランダ人より聞いた話やオランダ書の記述を紹介するもので、オランダの歴史や風俗、病院・流行病から顕微鏡など科学技術に関する記述まで多岐にわたる。

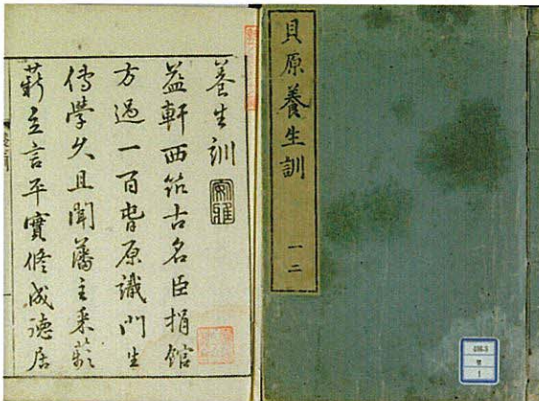
養生とは

養生とは肉体ならびに精神の安定をはかることによって健康を保ち、日頃から病をよせつけないような体を維持することです。その原理と方法を述べているのが養生書で、江戸時代の儒学者・貝原益軒（1630-1714）の『養生訓』（1713年）は、多数出版された養生書の中でも有名でした。それはこの書には、当時の人々が理想として目指すべき生活態度について、具体的な方法が紹介されていたからです。貝原益軒はこの書の中で、欲望のほしのままに生きるのではなく、自制して無病長寿を目指して、肉体的にも、精神的にも慎重に生活することが重要であると説きました。



貝原益軒肖像 ▶

狩野昌運画 元禄8年(1695) 財団法人武田科学振興財団 杏雨書屋所蔵
貝原益軒（1630-1714）は江戸時代の儒学者で、医学、本草、農学など自然科学に造詣が深かった。



◀『養生訓』

巻第1-8・附録 貝原益軒編録 文化9年(1812)版

食事と養生

食事の役割は、日常生活における活動エネルギーを確保し、自己の身体を成長発育させ、健康を維持することです。しかし、その一方で、食物に対する摂取規制も行われてきました。

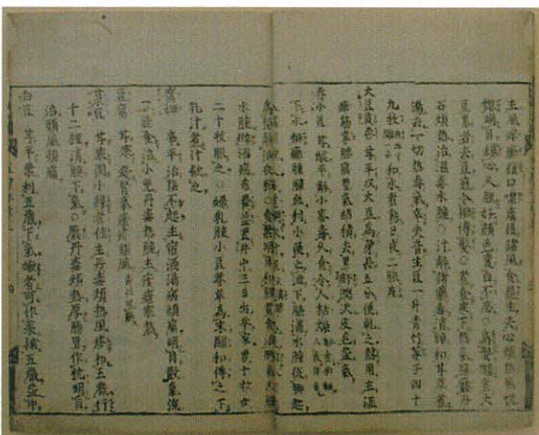
これは、医薬の発達や普及が未だ十分でなく、食物が豊かでなかった時代に重要視されたもので、麻疹などの重い病気の際に、特定の食物を食べてはいけないという禁忌のことです。食に関する禁忌は食禁とも呼ばれ、中国などから移入した医学や本草学の知識と人々の経験に基づく知恵といえるでしょう。



「沢村田之助麻疹養生之事」▶

鶯斎画 文久2年(1862)7月 37×25

病気の時に食べてよい食物と食べてはいけない食物、および日常生活の禁忌が書かれている。沢村田之助は江戸時代に女形で活躍した歌舞伎俳優である。



▲宜禁本草

曲直瀬道三編 成立年不明

曲直瀬道三（1507-94）は安土桃山時代の医学者で、この書の初版は寛永6年（1629）とされる。食用としての観点から植・動・鉱物を解説し、病気に対する食物の良否を述べている。

※宜禁（ぎきん）＝食べてよいものと食べてはいけないもの

企画展図録

「江戸に学ぶ からだと養生」

『解体新書』などの蘭学に関する書籍や解剖図、『養生訓』などの養生書、食養生の資料などを写真と解説でわかりやすく紹介しています。

・A4判 48ページ ・定価 1,000円

館内のほか、FAX・郵送でのご購入もできます。
ウェブサイト「くすりの博物館」に掲載の注文書もご利用ください。

